
奔放ガールに初恋を。

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奔放ガールに初恋を。

【Nコード】

N6498K

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

よく言えば自由奔放、悪く言えば尻軽。そんな噂で有名な高校二年生の百田沙良は、ある日純粹真面目な一年生に告白される。適当な気持ちで付き合いだしたはずが、気づけば少しずつ何かが変わってきて 奔放ガールと純粹彼氏のラブストーリー。 ベタ恋2010春、テーマ「初恋」参加作品です

(前書き)

「ベタ恋2010春」で検索されると、他の方の作品も読めます。
ぜひ素晴らしい皆様によるベタワールドをお楽しみください^^

新学期が始まってまだ間もない四月のある日。

午後の暖かな窓際、手鏡で赤くなつた頬を見ていたあたしの肩を誰かが叩いた。

「おつす。まーたやつたんだってえ？ 沙良^{shira}つてば相変わらずお盛んなんだから。で？ 今度はどんな修羅場よ？」

青みがかつた黒のショートボブをかきあげた奴を見て、あたしはため息。

「ただ彼氏を寝取つただの何だの、騒がれたただだよ。別にとつたんじゃないくて、ただその場限り楽しんだだけだつてちゃんとやつたのにこのザマ。ついてないよねー」

「そりゃあ怒るに決まつてんでしょ、相手の彼女からすれば。いくら誘つたのが自分の彼氏でも、悪者は相手つてのが女の心理つてやつなのよ」

あたしの手鏡でグロスを塗りなおしながら笑われて、ぶうとふくれる。

「うるさいなあ、椎奈^{shinai}。あんただつて同じようなもんでしょが。聞いたよ、十人同時の噂。あたしよりひどいじゃん」

唯一の親友と言える木下椎奈は、ストレートな皮肉なんて全く気にせずウインクまでしてみせた。

「ほほほ。お褒め頂きどうも。沙良もあたしみたいにくまくやらなきゃ。あんたの場合、後処理が適当すぎんのよ」

子供みたいに頭を撫でられて、あたしはぶいと横を向いた。そのまま長い茶髪の枝毛カットを再開する。

さらさらな手触りは男受けがいいから、欠かすわけにはいかない作業なんだ。

「いいもん、別にそんなの適当で。誰がどうなるうとあたしの知つたこつちゃないし」

「あのねえ、そんなやり方してたら、いつか刺されちゃうかもよ？」
ふざけた口調で注意する椎奈を無視して、昼休みの教室を出る。
通り過ぎざまにこそこそと何事か話し合うクラスメイトの女子たちも、ついでに無視して。

「あんたたちねえ、言いたいことがあんなら直接言えば？」
ばん、と扉に手をつけて威嚇する椎奈の声に、あたしは笑った。

あの子たちに何で噂されてるかなんて知ってる。

ももた百田沙良は淫乱尻軽、最低女。見た目だけは綺麗でも、中身は単なる男のおもちや。

二股なんて序の口で、三股、四股もへっちゃら。優しくしてくれる男なら誰にでも尻尾を振ってついていく。

一度寝たらあとはどうでもいい。あっさり捨てて、また次の男だったかな。

言ってること全部本当で、自分でもわかってるから平気だ。

さつき椎奈に言ったこと、それが真実。あたしのポリシー！。

人生なんて楽しければそれでいい。あとに何も残らなくてもかまわない。

何もいらない。何も必要ない。あたし自身でさえも。

そんな自分を覆すことになる人物とあと数時間後に出会うなんて、この時のあたしは全く予想してなかった。

放課後、靴箱を開けたら足もとに落ちた白い紙。

拾うとそれは今時珍しい白い封筒のラブレターだった。

「一年五組、米倉……なんじゃこりゃ。フリガナふっとけつつうの」
米倉なんとか君に会うべく、何の気なしに指定された裏庭へ向か

う。

クラブ活動もバイトもしてないあたしは、忙しくもなんともないから。

いや、それが理由じゃないな。ただ、面白そうだったから。

「さっ、沙良さん！ 来てくれたんですかっ！」

感極まった瞳は冗談じゃなく潤んでいて、あたしとそう変わらぬい背格好はどことなく頼りなさげ。

それが彼の第一印象だった。

「あ、あ、あのう 僕、中学の頃から沙良さんのことがすっ、好きで……追いかけてこの高校に入りました！ 僕とお付き合いです！ お願いします！」

ふわふわした天パの頭をしきりと掻きながら、彼が最後まで言い終えるのを待っていたあたしは、ただ一つだけ気になっていたことを訊ねるべく口を開く。

「ふうん。でさ、下の名前何て読むの？」

はい？ と首を傾げた間抜け面に、あたしは「いいよ」と笑ってやったのだった。

雄飛ゆっぴ

雄々しく飛べって意味で親が名づけてくれたんです、と直立不動で答えた雄飛は、その日からあたしの彼氏になった。

といつてもあたしにとってはたくさんいるうちの一人でしかなかったし、どうせ飽きたら忘れる予定の存在でしかなかったんだけど。ただ、入学したての雄飛はあたしの噂なんて知らないわけで、見るからに純粹真面目そうな少年だったから、真実に気づくまで放っておくことにした。

本音を言えばあつくされもない楽な男たちが一番なんだけど、たまにはこういうのもいいかな、と思ったから。

ひどい女だと思うなら、わかった時に離れていけばいい そう

結論付ける間に、告白から一週間が過ぎていた。

「沙良さんっ！ お昼一緒に食べましょう！」

昼休みのチャイムが鳴るやいなや現れた雄飛に、さすがに辟易としながら目線をやる。

「べ、別にいいけどさあ。またお弁当作ってきたの？」

「はい！ 今日沙良さんが好きな甘い玉子焼きです。あと、おかかとお梅のお握りにかぼちゃの煮物。タコさんウィンナーもありますよ」

えへへ、と嬉しそうに笑う雄飛は料理が趣味らしい。自炊しないあたしからすればその神経を疑うけど　まあ、おいしい弁当が食べられて悪い気はしないわけで。

「おっ、うまそーじゃん。あたしもひと口」

「あ、椎奈さん。だめですよぉ〜玉子焼きは沙良さんのです！」なんて、近寄ってきた椎奈の手をぺしっと叩く雄飛。

ケチ、とぼやく椎奈と雄飛の攻防の合間に、玉子焼きをしつかり頂く。

うーん、ふんわり甘い完璧な美味具合。

やっぱり雄飛と付き合うことにしてよかったかな、とか考えていたあたしの向かいで椎奈が言った。

「それにしても雄飛、あんた結構やるねーもう三年まで噂だったよ」

「えっ、そうですか？　僕はただ皆さんからの質問に答えただけなんですけど……」

頭を掻く雄飛と、その背中をばしっと叩く椎奈。

ん？　何このやり取りは。もごもごと玉子焼きを頬張ってたら、

椎奈がふふんと笑ってあたしを見た。

「沙良さあ、全然知らないの？」

「何をよ」

「あんたがついに年貢を納めたってウ・ワ・サ。マトモな奴と付き合うことにして、他清算するらしいって皆言ってるよっ」

こっそり耳打ちされた内容に喉をつまらせそうになったあたしの

背中を、雄飛があわててさする。

「大丈夫ですか？ そんなに驚かなくても　僕がちゃんと言っておきましたからね！　沙良さんと僕は真面目に交際してますって！」

何をどう誤解してるんだかわからないけれど、なぜかにつこり笑顔で宣言して、雄飛は一年の教室に戻っていった。

「もう今じゃ学校中が知ってるみたいなものよ。いいのお？　男遊び終了しちゃう気？　あれっ、もしかしてそれが雄飛の思惑だったりしてねーはは、やっぱ意外とやるよあいつ」

椎奈に笑い飛ばされて、変な汗をかいた時にはもう遅かったのだ。

告白から二週間、四月も末に入る頃にはすっかり暇をもてあましていた。

毎晩、いや一晩に複数なんてことも珍しくなかった男との約束が少しずつなくなって、気づけばいつも雄飛と一緒に。あとくされなさそうな相手を選んでたからってのもあったかもしれないけど、だからってちよつと薄情じゃない？

勝手な文句を心の中で呟いて、携帯を広げてはみたものの、さすがに目の前で他の男に電話するわけにもいかず　結局こうしてソファに寝転びながら、雄飛が作る夕食を待つあたし。

「沙良さん。もうすぐカレーできますよお。お皿、お皿取ってくださいってば」

「めんどくさい。戸棚のやつ勝手に出してよ」

リモコンをいじりながら振り向きもせず回答しても、雄飛は全く気にする様子もなく「だめですよー！　働かざる者食うべからずって言うでしょ？」とオタマ片手にお説教と来た。

「…………たたく、うるさいなあ」

ぼやきながらもいつのまにか雄飛のペースに巻き込まれて、あた

しも皿出しちゃってるし。

だってこの台所で誰かが料理を作るなんて、小さなピンクのテーブルに二人分のご飯が並ぶなんて。

いつも一人でコンビニ弁当か、連れ込んだ男とただらするだけだった部屋が、雄飛といるとちゃんとした『家』みたいで落ち着かない。

くすぐったい気持ちは嫌なものじゃなかったから、ちょっとほだされてるだけなんだ。おいしいご飯が食べられるから、ただそれだけだつて。

「おいしい」

つい言ってしまったら、雄飛は天にも昇りそうなくらい嬉しそうな顔をする。

「よかったあ。カレーは僕の得意料理なんですよ。実はスパイスに凝つてまして……」

なんだかよくわからない粉の類を見せながら話す雄飛の言葉は半分以上右から左に流れていたけど、最後の言葉に耳が反応した。

「僕も家に帰つても誰もいないから、沙良さんと一緒に食べられて嬉しいんですね」

尻尾ふりふりな子犬イメージだっただけの雄飛が浮かべた、少し寂しげな表情に胸がちくんと痛む。

そっか、離婚して母一人子一人だとかちらつと言つてたっけ。

母親だけでもいるんだからいいじゃん、とかいつもなら言いたくなるところだけど、その寂しさはよくわかるから、あたしは持っていたスプーンを置いた。

「さ、沙良さん……？ な、何やってるんですか？」

「え？ 何って脱いでんだけど。ほら、あんたも早く脱ぎなよ」

突然したくなつちやつたからつてだけで大して理由なんてないのに、「なっ、なんで！？ つていうか何のために？」なんて口から泡でも出しそうな勢いで雄飛が飛びのく。

「だつて 寂しいんでしょ？ あつたためてあげるからさ」

肌と肌でよしよししてやろうと思ったのに、ブラウスのボタンを開けるあたしの手をがちり掴んだ雄飛が、目をそらしたままぶんぶん頭を振る。

「だめです！　そういうことはもつと、そ、その……お互いのことを知ってからじゃなきゃ！」

「何を知るのよ。もう名前も家も知ってるんだからいいでしょ？」

趣味とか？　んーとネイルいじりとシヨッピング？　それとも家族構成？　両親は昔事故で死んで、姉が一人。これでいい？」

首にしがみつこうとした両手は、必死な顔で押し戻された。

「そつ、そういうことじゃなくて　とつ、とにかくだめです！

僕は沙良さんを大事にしたいんですっ！」

精一杯叫ばれて、あたしは口をあんどぐり開くことしかできなかつた。

結局手を出されることもないまま、なんだかんだで時は過ぎ、一、二年合同ハイキングの日がやってきた。

新しいクラスの親交を深める、とかいうご大層な目的はもちろんあたしにはどうでもよくて、さつきから何度目かの休憩中。

「いい子じゃん、雄飛。本気で考えてやればー？　あなたにはああいう子が合うかもよ」

隣でペットボトルのお茶を飲む椎奈に言われ、ふるふるとあたしは首を振る。

「やだよー。そろそろウザいんだって。だってまだ手すら握らないんだよ？　それもキモくない？」

「そんなこと言って、あんたもわかってんでしょー？　本当はそういう奴がちゃんと自分のこと好きだと思ってくれてるって」

あたしの内心なんてお見通しだって顔で、椎奈が答える。

でもでも、やっぱりああいう奴とあたしは住む世界が違うんだよ。これ以上一緒にいたって、どんどんその差が開いていくだけだつて。

心の中でぼやいてたあたしの前に現れたのは、見慣れた笑顔。

「ちよつと沙良、あたし知らないよ？」

珍しく警告してきた椎奈の言葉にちよつとだけ後ろ髪を引かれる。そんな自分にむしゃくしゃして、わざと嬉しそうな笑顔を作った。

「久^{ひさ}つてば冷たいじゃーん。なんで電話くれなかったのよ」

適当に会っては遊ぶだけだった男だけど、甘えたふりして言つてやる。

もちろんこれが単なるお愛想だつてわかつてる久は、あたしにとつても楽な相手だ。

皆がいる広場から少しそれた木陰に連れ込まれて、肩を抱かれる。

「お前が更正したつて聞いたからさ。でもガセだったんだ」

嬉しいよ、またこんなことできてさ　囁きかける久の唇がおりてくる。

雄飛とは違う長身の、広い胸に包まれて目を閉じた。

久しぶりに誰かの体温を感じた一瞬、ガサガサと草を分ける足音が聞こえた。

「なつ……何やってるんだ！　沙良さんから離れる！」

瞼を開いたあたしの瞳に飛び込んできたのは、息を切らした雄飛の姿。

なんで？　どうしてここに　？　つてそんなこと考えてる場合じゃなかった。

「離れろつて言ってるだろ　！」

飛び掛ってきた雄飛を簡単にはらいのけて、久が口元をゆがめる。「バーカ。何が離れる、だよ。お互い同意の上だつっーの。こいつはそういう女なんだよ。そんなことも知らずに舞い上がってんじゃねえよ！」

けんかなんて慣れてる久からしたら、雄飛なんて簡単にぶちのめ

せる。

さっさと逃げればいいのに　このバカ、なんでまた向かっていくのよ！

「沙良さんを侮辱するな！　沙良さんはそんな……そんな人じゃないっ！」

真つ赤な顔で久に飛び掛っていく雄飛。その必死さにはいい加減耐え切れなくなつたあたしは、思わず口を開いていた。

「そんな女なのよ、あたしは！」

「沙良さ」

雄飛の瞳が見開かれる。なぜか直視できなくて、二人から一步離れた。

「あなたが望んでる純粹な『彼女』なんかじゃない。そんな風にはなれない。本気の関係なんてうざいだけ　それが嫌なら、さっさと別れれば？」

ぶつけた言葉への反応は見ないまま、あたしはその場から逃げることを選んだ。

本当はどっかでこうなつてほしいと思つてた。

そうだよ、ほつとしてるくらい　なのになんであたしは逃げてるの？

ゆるやかな傾斜の下山ルートをおりながら、ぐるぐる回る問い。

そんなのわかんないよ。だけど見たくなかつたんだ、雄飛の顔を。

怒つた？　それとも傷ついた？

でもそれでいい。だって雄飛にはあたしみたいな女じゃないほうがいい。

もつと真面目で、純粹な普通の子がいいんだ。

ずきん、と痛む胸に足が止まる。一瞬の動揺に驚いていたあたしは、背後で聞こえた声に気づくのが遅れた。

「やっぱり、あんたって最低ね」

振り返ったあたしを、仁王立ちして睨みつけていたのは見知らぬ女。

雄飛と同じ色のジャージを着ていることからして、一年らしいけど どうして睨まれているのかわからない。

きよとんとしていたあたしに苛立ったのか、すぐ近くまで歩み寄ってきた。

「淫乱尻軽、そんな女が雄飛くんの彼女だなんて そんなの絶対許さない。だからわざわざあの人たきつけて、あんたを誘ってもらったのに……どうして逆に雄飛くんを傷つけたりするの!」

そういうことか、とやつと事態を飲み込んだ。

なんだ、雄飛だって結構モテるんじゃない。はめられたとかそういう事実より、なぜか考えたのはそんなこと。

「中学の頃から、ずっとそばで見えてきたんだから……それなのに、どうして選ばれたのはあんたなのよ!」

潤んだ瞳で見上げてくる彼女はあたしよりも背も低くて華奢で、いかにも女の子らしいふわふわロングの可愛い系。

責められてるはずなのに、どこかで納得してるあたし。

そうだよ、あいつにはこういう子のほうがよっぽどお似合いだよ。

だから あたしは笑った。

「そうだよ。でも心配しないで。もう向こうが愛想つかしただろうし だからさっさと告白しなよ」

親切心のつもりだったのに。

百パーセント、とは言い切れなかったのが裏目に出たのだろうか。

「……っ、ふざけないでよ!! この、最低女 ……!!」

ドン、と肩を思いつきり押された。まったく予想外の行動だったから、足を踏ん張ることもできなくて。

そのままあたしは斜面を転がり落ちていった。

目を開けたら、最初に見えたのは白い天井。

そして、雄飛の心配そうな瞳。

「あ、れ……夢？」

眩いた途端襲ってきた全身の鈍痛で、フラッシュバックされるさ
っきの光景。

あ、そっか　あたし、突き落とされたんだっけ。

他人事のように思えたシーンは、目線を巡らした先に見えた白い
包帯の数々で急に現実味を帯びてくる。

「あちこち打撲と擦り傷だそうです。それから軽い脳震盪　落ち
た先が茂みだったからよかったです。お医者さんが言っていました」

淡々と説明されて、ああ、と二度納得。

きつと責任感から付き添ってただけで、久とのことをまだ怒って
るんだろう。

こんなあたしだから、自業自得とか、ざまあ見るとか思ってるの
かも。

とりあえず迷惑かけたことでも謝つとかなきゃ。

寝たままだと俯いた雄飛の顔がよく見えなくて、あてて、と呻き
ながら体を起こす。

ごめんね、と言おうとしたあたしの口は、窓から差し込む夕焼け
の光に照らされた顔を見たことで固まった。

「ごめんなさい　沙良さん！」

あたしが言おうとした言葉を先に口にした雄飛は、ぼろぼろ涙を
流して泣いていたのだ。

男の子の泣き顔なんて初めてで、しかもこの状況でどうして雄飛
が泣くのかわからなくて、すっかりパニックに陥ったあたしの前で、
雄飛が続ける。

「僕のせいでこんなこと……守ってあげられなくて、ごめんなさい
！」

驚きすぎて言葉さえ出てこない。固まったままのあたしを見て、雄飛が心からほっとしたように呟いた。

「よかった、沙良さんが無事で　本当に」

さすがに恥ずかしくなったのか涙を手の甲で拭いて、照れ笑いを浮かべている。

「ば……ばかじゃないの。あ、あたしのことなんかそんなに心配してさ。大体あたしは　」

言いかけたあたしに人差し指で静かに、と示してみせて、雄飛は笑った。

「知ってました、本当はずっと前から。沙良さんの噂は全部チエックしてましたから」

「じゃあ何で……」

てつきり何も気づきもしないお子様だと思ってたのに。

笑顔を収めた雄飛の瞳は、急に大人びて見えてドキリとする。

「沙良さんは僕の初恋だから」

大事な人なんです、と笑った顔がまぶしく思えたのは、きつと夕焼けのせい　。

ずっと見つめていたのだと、雄飛は言った。

あたしのマンションと通学路が近いから、初めはよく目にする派手な女子高生だと思っただけ。

「それがね、たまたま見ちゃったんです。このベランダから、一人で夜空を見上げてるところ」

また凝りもせずマンションに出入りするようになった雄飛が笑う。「その瞳がすごく寂しそう　それでなんか気になっちゃって。会つのが楽しみにして、会えない日は悲しくて。それで気づいたんです、これが恋してもんなだつて。そしたらよく男の人と一緒にいるし、しかもいつも違う人だし、そりゃあ気づかないわけにいか

ないですよ」

寂しげにもらず雄飛の隣が少し居心地悪くつて、あたしも笑った。「じゃあどうしてよ？ こんな尻軽女、近づかなきゃよかったのに」「そんな言い方しないでください！ 沙良さんはそんな人じゃないそれに 辛いつてわかってたつて、好きな気持ちは抑えられない違いますか？」

まっすぐ見つめられて、目をそらさずにいられなかった。考えちゃいけないのに、雄飛の言葉が鍵になる。

胸の奥に押し込めていた想いが急に蘇ってきて、目を固く閉じた。どうして思い出させるのよ 苦しくてたまらなかった、あの辛い想いなんて。

雄飛が何か言いかけた、その瞬間だった。玄関のチャイムが鳴って、ドアを開けたあたしの目の前に現れたのだ。

決して手の届かない相手だった、苦いあたしの『初恋』無理やり過去形にしたはずの想いは、やわらかい微笑を見たことで鮮やかな現在進行形に変わる。

「久しぶり、沙良ちゃん」

低く滑らかな声が直接あたしを呼ぶのは、何年ぶりだろう。

中学に入ってからには既に彼を避けていたから もう思い出せない。

「……お義兄さん。どうしたの突然、びっくりするじゃない」

やっと出した自分の声はまるでロボットが喋ってるみたいだったけど、幸い彼は気づかなかつたらしい。

「こつちに置いたままにした由梨江の荷物、ちよつと取りに来たんだ。それにしてもなんか他人行儀だなあ、お義兄さんだなんて。昔はいつも優兄ちゃんおんいって呼んでくれたのに」

近づいた時に香るタバコとコロン。昔と変わらない匂いに胸がき

ゆうんと締め付けられた。

「だって、お義兄さんはお義兄さんでしょ」なんて笑い返す自分に驚く。こんなにドキドキしてるのに、普通に話せるなんて。

「あれ お客さん？」

傘立ての横にあつた雄飛のスニーカーを見た彼の言葉で、急激に現実へ引き戻される。

「ちよつ、ちよつと待って……！」

あわてて止めるあたしを放っておいて、どこか楽しげな顔で彼はリビングへ歩いていく。

ソファにちよこんと座っていた雄飛が、かしこまって立ち上がった。

「君、沙良ちゃんの彼氏？」

穏やかに訊ねられて、雄飛が緊張した顔になる。

「ちつ、違つよ、優兄ちゃん。彼はただの」

思わず昔の呼び名が口をついて出て、自分の顔が赤くなっているのがわかった。

「彼氏です」

ふいにあたしの腕を引いた雄飛が答える。

「何言つてんのよ、ちよつと……」

否定しかけた声は、強い腕の力で止まる。

「そう。大事な義妹だから、大切にしてくれよ？」

ふつと笑つて言つた彼に、雄飛も張り切つて返事している。

目の前で繰り広げられている光景なのに、どこか遠く見えた。

彼が帰つた途端、あたしは叫んでいた。

「どうして余計なこと言うのよ！ よりにもよつて……彼の前で！」

なんで自分が怒っているのかもわからない。でも腹が立つんだから仕方ない。

あたしの滅茶苦茶な叫びをただ黙って受け止めていた雄飛は、少し俯いて呟いたのだ。

「そっか。あの人だったんだね　沙良さんの忘れられない人」
。　なんとなくそんな気がしたんだ、と笑った顔はちよつと切なげで

あたしの神経を逆なでした。

「何よそれ……勝手に何でもわかったようなこと言わないで！」

「沙良さ」

「初めて好きになった人は姉の恋人で、二人が目の前で結婚するのを見てたあたしの気持ち……あんたにわかるの!？」

ついに叫んでしまったら、流れ出した涙と胸の痛みは止まらなくて、あたしは部屋を飛び出していった。

外はいつの間にか雨が降ってたけど、濡れることなんてどうでもよかった。

そうだ。あたしはずっと苦しくて、苦しくてたまらなかった。

どれだけあきらめようとしても彼ほど素敵な人なんかいなくて、だからあたしはやめたんだ　恋することを。

本気にならなければ、傷つくことなんてない。その場限りの温もりだけが、あたしを癒してくれる。そう思ってた。でも、本当は違つたなんて　。

「沙良さん、待って！」

追いついてきた雄飛に腕を引かれたけど、思い切り振り払う。
なのに雄飛は強い手であたしを引き寄せて、抱きしめたのだ。

「離してっ！」

腕の中から抜け出そうと両手をつっぱる。だけど雄飛は絶対に離そうとしなかった。

「だめです！　聞いてくれるまで離しません！」

打ち付ける大粒の雨に負けなくらいの声で言われて、よつやく
気づく。

あたしを抱きしめる雄飛の腕は震えていたんだ。

「僕だつて……本当はずつと辛かった。好きな人が、他の男の腕に
なんて。でも沙良さんは……沙良さんの心は純粹なんだつて僕
は知ってたから、だからあきらめたくなかった。ガキだからとか、
初めてだからとか そんなこと関係ない！ 本気で沙良さんのこ
と好きなんです！」

だから、そばにいてください。

雄飛は囁くような声で言った。

まだ肩のあたりに余裕がある学ランが、雨でずぶぬれになってい
る。震える腕が、あたしをぎゅっと包んでいる。首元から少しだけ
汗の匂いがして あたしは思っていた。

ああ、これが『男の子』の匂いなんだつて。

いろんな男と肌を重ねてきたのに、それは初めて感じる、優しい
匂いだつた。

後日、優兄ちゃんは再びマンションにやってきた。お腹の大きく
なつたお姉ちゃんと一緒に。

本心はシヨックではあつたけど、素直におめでとつと言える自分
がいた。

「ありがとう。ほら、沙良にも祝福してもらつたんだから、ちゃん
とタバコやめるのよ？」

穏やかながらも、しっかりと念を押しお姉ちゃんが席を外した時、
優兄ちゃんがこっそりあたしに向かって舌を出した。「うちの奥さ
ん、ああ見えて結構強いんだよ」だつて。

幸せそうにお腹を撫でるお姉ちゃんと、優しく見守る彼を見なが
らあたしは思つたんだ。

ずっと引きずってきた想いを、これで過去にすることができ
る
つてね。

「えー？ マジで全部清算したの！？」

いつもの余裕はどこへやら、目をまん丸にした椎奈にあたしは頷く。

「清算っていうか、もう連絡のとりようもないし。ほら、データ全部消えちゃったもん」

携帯を見せて笑うと、しばらくまじまじとあたしを見ていた椎奈が、何かに気づいたように隣の雄飛を見た。

「やーっぱねえ！ こいつ、意外とやると思ってたんだ。あたし！ わしわしと頭を撫でられても、雄飛はとぼけたふりして「やめてくださいよー」なんて言ってる。

あの雨の夜、『本気』の彼に怒られて、携帯の男データを削除させられた。

『僕との恋を、本当の初恋にしてみせます！』なんて悔しそうに叫んだ雄飛の顔が浮かんで、思わず笑ってしまう。

可愛い奴 　いつしか、そんな風に思ってる自分がいた。覚悟しときなよ？ 　あたしの『本気』は結構熱いんだから。

心の中で忠告したら、目が合った雄飛が笑う。

肩までの長さになったあたしの髪を、初夏の風が静かに撫でていった。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます！

「初恋」をテーマにしてお送りした作品、いかがでしたでしょうか？

「初恋」といえば実らない切ないもの、そして初々しく甘酸っぱいもの、そのどちらもが書きたくて考えたお話です。

自分ではベタをちりばめて頑張ったつもりなのですが、皆さんに気に入っていただけたら幸いです。

感想・評価等、何でもお待ちしています^^

べた恋企画に参加できて、とても嬉しかったです。

引き続き企画をお楽しみください！

2010年4月1日

文樹妃 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6498k/>

奔放ガールに初恋を。

2010年10月8日12時04分発行